

こたえ このはしわたるべからず

ひょうじゅん
標準 ①

このはしわたるべからず

(日本の昔話)

昔、一休さんという、とてもかしこい小僧こぞうさんがいました。ある日、一休さんは、とのさまのお屋敷やしきによばれました。屋敷やしきの前には川があり、橋の手前に、こんな立てふだたてふだが立っていました。

「このはし わたるべからず」

「はし」をわたってはいけない、ということです。とのさまは、一休さんがどうするか、楽しみにまっています。

ところが、一休さんは、平気な顔で橋のまん中を歩いてきました。

「立てふだたてふだが読めなかったのか。」「いいえ。『はし』をわたるなど書いてありましたので、はしっこではなく、まん中まんちゆうを通ってまいりました。」

とのさまは、思わず大わらいしました。

1 橋の手前に立っていたのは、何ですか。

立てふだ

2 一休さんは、橋のどこを歩いてきましたか。

ア はしっこ

イ まん中

ウ 橋の下

3 一休さんが、橋をわたってもよいと考えたのは、どうしてですか。

「はし」を、橋ではなく、はしはしのことだと考えたから。

4 とのさまが大わらいしたのは、どうしてでしょう。

ア 一休さんが、川に落ちたから。

イ 一休さんの、とんちがおもしろかったから。

ウ 一休さんが、立てふだたてふだを読めなかったから。

おうちの方へ

- 「橋」と「端（はし）」のように、同じ音で意味のちがう言葉を使ったとんちです。